

事例番号 117 携帯電話でどこでも博物館（広島県尾道市）

1. 背景

尾道市は自然の良港を持ち、平安時代に備後大田荘(後、高野山領)の船津倉敷地、荘園米の積み出し港となって以来、対明貿易船や内海航行船の寄港地として中世、近世、近代と時代を経るごとに豪商を生み、商業都市として大きく発展した。特に江戸期においては北前船の寄港地として賑わい、多くの神社仏閣の寄進造営も行われた。尾道が北前船の寄港地となったのは、この地が瀬戸内の物産の集散基地であり、持ち込んだ積荷を売り捌き、その代わりに買い入れる荷を扱う商家が多く存在していたことが主な理由である。商勢は時に京阪神をしのぎ、名高い大阪商人さえ尾道に出張商いをしていたという記録があるほどであった。

近代以降は第二種重要港湾の指定を受けて大正から昭和にかけて瀬戸内の重要な産業港として発展した。戦後の高度経済成長期には山陽新幹線や山陽自動車道など東西の国土軸も整備され、瀬戸内工業地域の一翼として造船業などが発達した。今後は瀬戸内しまなみ海道、中国横断自動車道尾道松江線(工事中)といった南北の幹線交通軸が交差する予定であり、「瀬戸内の十字路」としての拠点性がますます高まる傾向にある。



尾道市 MAP (資料:尾道市ホームページ掲載図を加工)

ところで、尾道市の市街地は「斜面都市」と呼ばれるほど平地が少なく、街路は多くの路地と坂道から成っている。そのため、近代化の過程においては車社会化に対応した道路・駐車場整備や市街地の交通環境整備が課題となったが、他方、坂道や入り組んだ路地空間は今も残る人情味あふれるコミュニティの舞台でもあり、また、坂道に沿って展開する変化に富む海と山の景観は町の大きな魅力でもあった。

尾道市には船が行き交う尾道水道があり、点在する寺院など 800 年を超える歴史を感じさせる景観がある。尾道市を訪れた多くの文人墨客の足跡も残されている。そして、これらの魅力に惹かれて今では年間を通じて数多くの観光客が訪れるようになっている。このような状況を背景に、尾道市では観光客に対する交通アクセスの案内や隠れた観光資源の情報発信などがまちの振興にとって不可欠な条件となってきた。このような背景の下、関係諸組織の連携により携帯電話を使った「どこでも博物館」が実現した。本稿ではその概要を紹介する。



坂の町の風景 (資料:しまなみ海道・SHIMAP ホームページ)



尾道水道を行き交う渡船 (資料:しまなみ海道・SHIMAP ホームページ)

## 2. 目標

尾道市の総合計画(2006年度～2016年度)の基本構想は、まちづくりのテーマを「活力あふれ感性 息づく芸術文化のまち 尾道 ～ともに高めあう尾道文化の創造～」とし、目標とする都市像を以下のように設定している。

〔目標とする都市像〕

- 1 個性をみがくまち (交流促進・交流基盤・産業)
- 2 人が輝くまち (芸術・文化・景観・環境・協働・教育)
- 3 安らぎのあるまち (安全・安心・生活基盤・健康福祉)

また、まちづくりの基本的方向と基本戦略を以下のように設定している。

〔まちづくりの基本的方向〕

- 1 新たな芸術・文化や産業の創出につながる交流の拡大
- 2 心の豊かさを共感できる地域社会の実現
- 3 少子高齢社会に対応した暮らしの安全・安心の確立

〔まちづくりの基本戦略〕

- 1 「地域の歴史に育まれた芸術・文化」を活かす
- 2 「瀬戸内の十字路に広がる活力・個性」を活かす

一方、2000(平成 12)年に策定された中心市街地活性化計画では、まちづくり目標を以下のよう  
に設定している。

- ① 愛着を感じ安心して暮らせるまち(生活者の視点から)
- ② 尾道の魅力を感じきれぬまち(来訪者の視点から)
- ③ 人が行き交う賑わうまち(事業者の視点から)

### 3. 取り組みの体制

尾道市のまちづくりは事業ごとに商工会議所、青年会議所、市民団体、NPO 等が連携して進め  
ているが、「どこでも博物館」の実現にあたっては様々な主体が関係している。具体的には、発案が  
竹村真一京都造形芸術大学教授、発案の場が「ニュービジネス懇話会」(市・地元経済界)、作成  
が尾道市商工会議所、実際のシステムづくりは同商工会議所から委託を受けた竹村教授と NPO、  
市民団体との協働、完成後は市に寄贈され運営が「尾道携帯観光ナビシステム運営委員会」(市、  
商工会議所、観光協会等)、サイト制作・システムマネジメントは NPO 法人「創造支援工房 FACE」  
(東京)、コンテンツの更新等が NPO 法人「プラットフォーム・尾道」となっている。

### 4. 具体策

#### (1) 「どこでも博物館」実現の経緯と運営体制

「どこでも博物館」は様々な組織の連携により実現した。発端は、2002 年に市と地元経済界が設  
立した「ニュービジネス懇話会」で竹村真一京都造形芸術大学教授が携帯電話を使ったまち案内  
システムを提案したことにある。そのシステムづくりは、尾道商工会議所が創設百十周年記念事業  
として約 700 万円をかけて行った。作成は竹村教授へ委託され、東京の大学院生が組織する NPO  
法人や市民団体の協働体制で進められた。そして完成後は市に寄贈され、2003(平成 15)年 4 月  
1 日に運営が開始された。運営は、そのために設立された「尾道携帯観光ナビシステム運営委員  
会」が担っている(運営委員は尾道市、尾道商工会議所、尾道観光協会、ニュービジネス懇話会、  
市民観光ボランティア「観光パートナー尾道の会」から選出)。サイトの制作・システムマネジメントは  
NPO 法人「創造支援工房 FACE」、コンテンツの更新やプロモーション等は運営委員会から委託を  
受けた NPO 法人「プラットホーム・尾道」が行っている。「プラットホーム・尾道」は「どこでも博物館」  
に当初から関わってきた市民等により設立されたものである。

#### (2) 「どこでも博物館」の仕組み

「どこでも博物館」は携帯電話のインターネット機能を使った観光ナビシステムである。尾道市内  
の神社仏閣やその他の観光名所、住民が誇りとする隠れたスポットなどに「石のフクロウ」を設置し、  
そのフクロウに書かれている 3 桁の番号を携帯電話に入力すると、その場所の名所案内や秘話、  
地元住民しか知らないエピソードなど、まちの情報を知ることができる。観光スポットによっては「石  
のフクロウ」に携帯用のソケットが置いてあり、それを携帯電話に差し込むだけで詳しい情報にアク  
セスできるアドレスが携帯電話に入力される仕組みになっている。「石のフクロウ」のデザイン・製作  
は尾道市で活動するアーティスト・園山春二氏(招き猫美術館館長)と加藤慈然氏(妙宣寺住職)  
によるものである。

「どこでも博物館」は、単なる観光案内のシステムではない。観光客等はスポットを訪れた際の感想や意見などを携帯電話等からオープンな掲示板に書き込むこともできる。そして、そのような双方向のやりとりを通じて場所の記憶が蓄積されていく。つまり、「どこでも博物館」は市内外の大勢の人々の協働により場所をつくっていくためのひとつのツールになっているわけである。

「どこでも博物館」の具体的なサービス内容は以下の通りである。

■観光スポットの情報提供

「古寺めぐり」「神社」「文学・芸術」「坂道」「名所」などの項目があり、尾道市内のお寺や文学のこみち、坂道、映画の撮影スポット、渡船、尾道大橋などの解説が提供される。地元小学生によるスポット紹介など、より地域性のある地元らしい情報発信も行っている。

■「おのみちっくキャラクター」

尾道のまちを歩いていると様々なキャラクター達に出会うことができる。ふしぎな尾道の住人(キャラクター)たちを「宝さがし」気分で探索することができる。

■「空中美術館」

フクロウを見つけて携帯電話でチェックすることにより、「尾道絵のまち四季展」でグランプリを受賞した絵画の構図となった風景を鑑賞することができる。

■「気持ち通貨」

お気に入りの風景や観光スポットなど、利用者が書き込んだ感想の票数により、WEB 上の観光資源に表示されているハートマークの大きさが変化する仕組みを導入している。

■「自己中マップ」

自分がどこにいるか、ここから次の観光スポットまで何分かかるを示している。



石のフクロウ「108 千光寺」（資料:NPO プラット・フォーム尾道ホームページ）

### (3) システムの高度化(全国都市再生モデル調査)

今やほとんどの来訪者が持つ携帯電話を活用した「どこでも博物館」は全国的にも大きな話題となり、視察が相次いだ。そこで NPO 法人「プラットフォーム尾道」は、システムの更なる進化を目指して 2004(平成 16)年に内閣府の「全国都市再生モデル調査」に応募し採択され、以下のような調査・社会実験を行った。

- ・ 地域活性化イベント(商店街おまつり尾道)においてワークショップ&アンケートを実施(平成 16 年 12 月 10~11 日)。まちの空き店舗やギャラリーなど 3 会場で「どこでも博物館」を PR し、市民を中心に約 120 名が参加した。同時に大規模災害時の携帯電話非常電源のデモ&アンケートを実施した。
- ・ 観光ボランティアガイドとのワークショップを平成 16 年 11 月 30 日~平成 17 年 2 月 13 日の間に 5 回実施した。「観光パートナー尾道の会」のスタッフ 3 名とともに NPO のメンバー 3 名が、実際に観光客を案内しながら尾道の代表的な観光スポットを歩き、「どこでも博物館」のシステムの使い勝手や記述内容などの調査を行い、既存コンテンツの改良(文学のこみちなど)を行った(社会実験)。
- ・ 市立美術館で開催された尾道大学卒業制作展で、FOMA の i-motion 機能を用いた「作品音声ガイド」を実験した。平成 17 年 2 月 11~19 日の期間中 1,800 名が来場し、約 90 名が音声ガイドを体験した。
- ・ 市内 430 の加盟店を持つ飲食組合の情報ページを新設するにあたりお店アンケートを実施し、掲載項目を収集整理した。掲載に際し、コミュニティ FM 放送や地域情報紙とのタイアップキャンペーンを実施した(CM、特集ページ作成、WEB でのアンケート&プレゼントコーナー設置など、平成 17 年 1 月 30 日~3 月 19 日)。
- ・ 市内約 150 ヶ所石のフクロウアイコン設置ポイントの全チェックを行った(フクロウの有無、設置場所の検討など)。また、QR 対応プレートのデザイン、耐候性や取り付け方法の検討、DoCoMo、au、vodafone 各キャリアの読みとり機能のチェックなどを行った(平成 16 年 11 月~平成 17 年 3 月)。
- ・ 情報交流拠点整備として、「どこでも博物館」の PR と観光情報の掲示を盛り込んだ PC デポシステムを市内外 8 ヶ所に設置した。千光寺公園内売店の PC デポシステムは、太陽光風力発電の電源とシンボルフクロウのモニュメントをセットにし、環境への配慮、災害時の非常電源対応とした。平成 17 年 1 月 10 日~3 月 20 日の間に随時設置した。
- ・ 商工会議所ビルにおいて「どこでも博物館」体験会を開催し、代表的な観光ポイントに設置されている目印の石のフクロウと QR コード付きの情報プレートを現場同様に並べ、その場で

擬似体験できるようにした。また、平成 17 年 2 月 28 日に尾道市立美術館で以下のシステムのデモンストレーションが行われ、市民、商工関係者など約 200 名が訪れた。

- ・ 尾道大学美術学科卒業制作展で公開された作品音声ガイドシステム
- ・ 尾道市が市内観光スポットで 3 月に公開予定の「足形みち」(有名人の足形約 120 足)で携帯電話により「足形の主」の情報が取得できるシステム
- ・ しまなみ交流館や尾道市東京事務所などで公開中の観光情報掲示システム
- ・ 大規模災害時に携帯電話の電源バックアップ装置として活躍が期待される風力太陽光発電 OWL システム 等

## 5. 特徴的手法

「どこでも博物館」は当初は観光情報のみを流していたが、それでは観光客は関心を持つものものまちな人々は関心を持たないということで、まちな生活情報も流すようになった。また、外国語のバージョンも作るようになった。これらの努力により、さまざまな立場の人々がアクセスし、多様な情報交換ができるシステムとなった。そして、システム立ち上げから 2 年が経過して市民・観光客の間で「どこでも博物館」の認知が高まり、利用数が増加した(アンケートへの回答結果、アクセス数の増加)。また、地域情報誌と「どこでも博物館」とのタイアップ広告により商店街の来店数が目に見えて向上し、紹介したコンテンツが人気商品となったり、ショップが運用しているサイトに注文が集まって品切れとなる現象も現れた。

## 6. 課題

尾道のまちづくりについて、市民等から以下の課題が指摘されている。

- ・ 駐車場・宿泊・アクセス機能が弱い(渋滞等)。
- ・ 団体客の受け入れに対応できる土産物販売や昼食の場所が少ない。
- ・ 道路事情が貧弱である。観光場所と駐車場とが直結していないところもある。
- ・ 独創的な土産物や食べ物が少ない(何でもあり過ぎて、これはという絞込みができない)。
- ・ 冬季の入城観光客が少ない。

特に、交通政策に関しては、車社会に対応した新しい交通環境整備の必要性が叫ばれているが、一方では「尾道では車の入らない路地空間が大事ではないか。車の入らない空間は、住む人にとってもプラスになる」という意見も市民からは多く寄せられており、今後は、路地や坂道、コミュニティの安心感といった尾道のまちな魅力を大切にしつつ、交通問題へいかに対応していくかが課題となっている。

「どこでも博物館」に関しては、まちな情報提供システムとして定着してきたが、全国都市再生モデル調査の実施過程で都市防災というテーマが急浮上した。もともと「どこでも博物館」の掲示板機能は災害情報伝達のシステムとして有効と考えられていたので、非常電源(太陽光等)とあわせてシステムを構築し、まちでの展示や市民意識調査を行った結果、市民の防災に対する関心が高いことがわかった。そのため、都市防災担当者やコミュニティ FM、ケーブル TV 等が連携しつつ、携

帯ホームページから災害情報を発信するシステムづくりを行う計画が進行中である。生活支援システムとしての活用も期待されている。

(参考・引用文献等)

尾道市ホームページ

NPO プラットフォーム尾道ホームページ

しまなみ海道ホームページ